

シノドス（世界代表司教会議）
第16回通常総会に向けて

2021-2023

ともに歩む教会のためー交わり、参加、そして宣教

京都司教区の回答のまとめ

✚ パウロ 大塚 喜直

2022年6月4日 提出



For a synodal Church
communion | participation | mission

A. シノドスの体験

- (1) 個人からの回答もあるが、コロナ禍で集まりにくい状況において、グループのわがちあいが出された意見を回答として提出したものが半数以上である。方法を工夫してわがちあいを実施しようとする熱意が感じられ、その段階でも歩む体験がなされたと言える。小教区からの回答が8割、そのうちの4割が外国籍の信徒からの回答（全体の3割強）であったが、教区内の多くの信徒が、これまで彼らの声に耳を傾ける機会がほとんどなかったことを考えると、外国籍の信徒が声を出す機会となったこと自体が一つの成果である。
- (2) 若い世代については、日本人信徒の回答がごく少数であることによって、若者が声を出す機会が少ない現状をあらわにしたが、一方で外国籍の信徒の回答には比較的若い世代が含まれていることに気づかされた。
- (3) 小教区以外の施設（教育、医療福祉関係、未就学児関連、その他の活動団体等）の回答は全体の1割強であり、小教区からの回答数に比べると、施設関連の回答は量的には少ない。しかし、質的には、大多数が信徒でない日本社会において、慈愛に満ちた奉仕や感謝の気持ちを祈ることを日常的に行っている施設は、カトリックの精神を伝えやすく、同時に利用者もそれを自然に受け入れている現場になっていることがわかる。また、施設の職員も信徒ではないが、ともに歩む仲間であることに気づかされた。
- (4) 修道会からの回答は全体の1割弱ではあるが、困難な状況にある人に寄り添う姿勢や社会の不正義への取り組みの不足、高齢者にできる福音宣教プログラムの作成、典礼の空洞化に対する警鐘などが、強い危機感とともに表

明されている。

- (5) 回答全体を通じ、教会と教会に集まる信徒の困難は現代の日本社会に大きく影響されており、社会と無関係ではありえないこと、より多くの人との連携や連帯の中に可能性があることを感じる。

- (6) 回答されなかった人の声を聴くことや思いをくみ取ることは課題として残る。今回のシノドスが日本の教会に変化をもたらすために、まだ参加していない信徒、奉獻生活者、聖職者に対して、教会とシノドスが同義であるという理解を促し、わがちあいを通じて、日本の現代社会の中でともに歩むことが、実りにつながると実感してもらえるような働きかけが求められている。

☆小教区からの回答45通、外国籍の信徒のグループ30通、施設（教育、医療福祉、未就学児、その他）12通、修道会8通、合計95通

※小教区からの回答には、個人の回答を集約して1通としたものもある。参加人数は、約800人（推定）。

B. 諸意見の識別

「日本の教会」といっても、外国にルーツのある人々が含まれていることを常に留意する必要がある。日本人信徒と外国籍信徒の考え方や感じ方における違いが回答内容に影響している、理解するうえで必要と思われる場合を除いて、回答者の属するコミュニティは明示していない。また、「外国にルーツのある人」とすべき箇所を、便宜的に「外国人」「外国籍の信徒」と表現している。

■質問1（旅の同伴者）

皆さんの教会で、「わたしたちの教会」というとき、誰がその仲間でしょうか。逆に、どういう人、またはグループが、教会内外で、取り残されているのでしょうか。

（1）

「取り残されている人」について関心が高く、考えるきっかけになっている。共同体を渴望しながら参加できない信徒への理解と受け止める姿勢が必要である。例えば、「施設入居者はミサに参加できない。信徒以外の人への遠慮、施設管理に協力することを優先せざるをえない」という声がある。

（2）

明確な理由がなく教会から離れがちな若者世代の多くは、同世代の若い仲間が共同体にほっといえないと感じている。「教会の魅力のなさが原因だ」という高校生からの指摘もある。

（3）

教会内の人間関係が原因となっていることや、子育て世代の思いも聞けていないことに気づかされた。「毎週欠かさず教会に来ることで、家族との距離ができた。子どもと過ごす時間が減り、子どもも親のしんどさを目にして教会を敬遠するようになった」という声があった。

（4）

地域によって小教区は国際共同体であるが、言語や文化の壁という難しい課題があるという意見とともに、協働ができていたという意見もある。「日本人信徒が声をかけてくれ、連絡事項を伝えてくれて会話ができ、日本語の勉強にもなる」。しかし、「技能実習生は職場における対話の難しさがあり、孤独を感じている（ベトナム人）」など、外国籍信徒の困難な状況のほうがより高い頻度で回答されている。

（5）

幼稚園や施設では、信徒でない教職員、園児、保護者、入所者、地域住民とのかかわりは日常的であり、信徒以

外の人とともに歩む実感が小教区より強く意識されている。

■質問2（聴くこと）

教会の内部で、また教会外の人々と、わたしたちの教会は、それぞれ誰に対し「耳を傾ける」必要があるでしょうか。何が、耳を傾ける助けと妨げとなるでしょうか。

（1）

声を出しにくい人、弱い立場の人の声を大切に聴き取ろうと考えているということが多くの回答から読み取れる。「罪人であるとか、不道德な生き方をしているとみなされる人に耳を傾けるべきだ（フィリピン人）」という回答があるが、外国籍のコミュニティーでは、不法就労、人身売買の被害などの問題もあり、耳を傾ける場や人が十分でない。

（2）

多忙で余裕がない、偏見や不寛容を克服できていない等、耳を傾けることを妨げる現実が、「人間関係によって耳を傾けたり、しなかったりする」という回答から見える。コロナ禍でミサに来てもすぐに帰宅するように要請があり、人間関係を深める機会が減ったことも、頻度の高い回答内容である。

■質問3（声に出すこと）

わたしたちの生活の中で、また地域社会や団体の中で、福音の価値を公に表明する場面がありますか。そのために、何が助けと妨げになるでしょうか。また社会に対して、誰が教会を代表して発言しますか。

（1）

小教区からは、日本社会で少数派のキリスト者は、福音の価値を表明することに困難を感じるという回答が多

い。地方では、地域社会からうさん臭く見られたという体験に基づいて、「近隣の人に反感や疑惑の目を向けられれば、地域で生きていけなくなる可能性がある」というような回答も少なくない。

- (2) 福音的価値の内容がよくわからないとか、それほど福音を理解していないので、「信者としての未熟から間違ったことを伝えることの不安や消極性がある」という回答とともに、声に出すことよりも、日常生活で「信仰を実際に自然に生きて、周囲の目に入るように暮らすことが表明になる」という意見が多い。

- (3) 奉獻生活者からは、「固定概念、小さな声をつぐんでしまうことによって、チャレンジできなくなっている」という意見もあった。

- (4) カトリックの幼稚園や施設は、信徒でない人にキリスト教の価値を伝える場所であることを、明確な活動の指針として意識している。小さな子どもや支援の必要な人と接し、慈愛の心で奉仕する現場である。「カトリックの教育施設は信徒でない人への影響力が大きく敷居も低い」という意見もある。

- (5) 外国籍の信徒からは、「大人が忙しくて子どもは声を出せない(フィリピン人)」「ジャッピーノは声が出しにくい(フィリピン人)」という回答があった。

■質問4 (祝うこと)

祈りと典礼において、信徒を含め、信者全体は、どのように参加しているでしょうか。参加は広がっているでしょうか、後退しているでしょうか。

- (1) 祈りと典礼への参加を「祝うこと」と表現したことを意外に感じたという回答があった。祝うという実感が伴わ

ないまま典礼に参加している現状がわかる。「典礼の形骸化を懸念、教会の歌が50年間更新されていない。見直しが必要」「祝うことと人間の内面から湧き出るものと調和がないことが典礼を空洞化する」という意見もあった。

- (2) 「式次第の改訂に際して典礼の本質を再認識する機会にしたい」と期待する声もあるが、「ミサを〈祝う〉という感覚に高めるのなら、教会が取り残している人々が〈祝う〉ことの実感できるミサになるべきだ」という意見もあった。

- (3) 小教区に多様な言語使用者がいる場合、配慮の有無も共同体によって差がある。信徒の多様性に対応することは当然だと思われるが、変化についていけない現状もある。「母語でミサが行われることを望んでも司祭がいらない地域もある(フィリピン人、ベトナム人)」という回答もある。

- (4) コロナ禍において、ミサ参列者の人数制限を実施したために、今までかわれなかった多くの信徒がかかわるようになり、「自分も聖書朗読ができてうれしかった」という声もあった。

■質問5 (宣教における共同責任)

皆さんの教会では、信仰教育や社会での奉仕活動の計画は、だが、どのように決定しているでしょうか。誰が計画の実施を担っているでしょうか。その人たちは、どのように選ばれ、どのような養成を受けていますか。それ以外の人たちは、彼らを十分に支援していますか。

- (1) 共同責任について、それを担うことを負担だと捉えている回答が多数あり、小教区の役割を特定の一部の人で引

き受けている現状は明白である。支援してほしい、みんなも引き受けてほしいという役員の思いがある一方で、引き受けたくてもできない生活状況にあって心苦しいという思いの人もある。負い目から教会に行きにくくなる信徒がいることも知っておくべきである。「教会に来る人、来ない人、よく奉仕する人、しない人で溝ができていないか、そのために余計に来にくくなっていないか」という回答がある一方で、少しでも信徒が増える努力をしなければならぬという思いも切実である。

(2) 信仰教育や社会における奉仕活動の計画の決定と実施については、かなり後退している分野である。信仰教育の必要性は誰しも理解しているが、「教会の理念が現代社会において意味があると伝える努力が不足している」「思春期の子どもへの信仰教育に悩む親への支援がない」という回答がある。

(3) 奉仕活動については、小教区ごとに継続的な取り組みがあったが、コロナ禍で中断し、再開に向けて現在のところは積極的な動きは少ない。しかし、中南米の人のコミュニティでは、「地域住民や外部コミュニティへの協力を呼び掛けることは満場一致で賛成し、積極的である」という回答もあった。

(4) 高校生から「初対面の人にも平等に接することはすぐ実行可能」という意見、青年から「友だちとボランティアなどに一緒に参加することもできる。自分は何もできないといつかかわらないことは無関心と安楽に逃げていくことだ」という意見があった。

■質問6 (教会と社会における対話)

皆さんの教会では、そのビジョンや方針はどのように話し合われ、決められていますか。近隣の教区、地域の修道会、信

徒団体などと、どのような対話と協力をしているでしょうか。信者以外の一般の人々と、どういった対話、協力の経験がありますか。彼らから、どのようなことを学んでいますか。

(1) 教会と社会の接点として、地域の行事に参加することや教会の行事に近隣の人を招待することが取り上げられ、それらがコロナ禍でできなくなったという回答が多い。

(2) 小教区の敷地や部屋を貸して地域の活動に使用してもらって交流ができていた例や、依存症回復支援団体に小教区として支援したり場所を貸したりしているという例(逆に、地域の強い反対で中止した例)もあるが、どちらかといえば実施が困難な要因があって消極的である。

(3) 「外国人のためのコミュニティイベントを、自治体の国際グループと共同で推進している」という中南米のグループがあるが、外国籍の人は生活のために地域や社会の支援と協力が必要で、フレンドリーな民族性もあって良好な関係を保ちやすい。質問3において、日本人が社会と距離を置くことは差がある。

(4) 社会福祉の分野で様々な団体の活動に参加している奉獻生活者もあるが、「現代社会に開かれ、社会的ニーズに応えて行動することが教会に求められている」というような積極的な考えはまだ少数で、多くの信徒は教会内の問題にとどまる傾向が強い。

(5) 正義と平和、教会の社会教説にかかわる問題意識は、ほとんど回答には見られない。わずかに、「環境問題、公害問題に関心をもち、公害で苦しむ人々、福島からの避難者等に寄り添う。(奉獻生活者)」という意見、「毎日の子どもの共同祈願で、社会を知り、身近な社会のために祈る(幼稚園)」がある。

(中等教育、高等教育の施設からの回答はなかったが、取り組

みがされていないとは言えない。)

■質問7 (他のキリスト教諸派とともに)

皆さんの教会は、他のキリスト教諸派の兄弟姉妹とどのような関係性をもっていますか。どういった分野に彼らは関心があるでしょうか。彼らとの対話の実りと妨げはなんでしょうか。

(1)

エキキュメニカルな活動は、合同の祈禱会や合同のイベントなど限定的である。それもコロナ禍で中断している催しがほとんどで、「東日本大震災の日に地域の宗教施設が鐘などを鳴らして一斉に祈る機会がある(田辺)」という回答があるぐらいである。

(2)

「受けたいとあなたが希望するならどうぞ」と言われた信徒がいる。教義を越えて交わりたくてもできないことがある、という葛藤を個人で解決することは難しいことである。

(3)

個人的な知りあいを通じて学ぶこと(差別の問題等)や、目的が一致する活動を共同ですることがあるが、協働によって多くの実りが可能になるといった積極的な発想は少ない。わずかに、「8宗派の宗教団体と市民アピールのための〈宗教懇話会〉を結成し、頻繁に活動している(丹波)」「釜ヶ崎でのかかわりは多岐にわたり、スタッフ、ボランティアとのかかわりがある(奉獻生活者)」という回答があった。

■質問8 (目標設定と実現での責任と参加)

教区や小教区の目標設定とその実現のためのプロセスは、誰が、どのように決定していますか。チームワークと共同責任

は、どう実践されているでしょうか。信徒の参加はどうでしょうか。教区レベルでの共同決定・共同責任を実践する機関はありますか。その実りと妨げは何でしょうか。

(1)

質問5に使われている「共同責任」ということばがあるために、回答に際して戸惑いがあったようだ。目標を設定して実現するためのプロセスを決定するうえで、〈チームワーク〉があるかどうか問われる質問と理解しておきたい。

(2)

チームワークができる条件を考えるうえで、「プロセスにおいて、会議がどんなに紛糾してもゆるしあえる信頼関係が必要」という回答が参考になる。チーム内でメンバーが互いに思いやることは簡単にはできないが、ともに歩むことをめざすために必要なことである。

(3)

集まっている信徒の高齢化が進んで、計画から実行までかわれる人が特定の人に限定されている問題がある。同時に、規約を作ってもその通りに役割を交代することができない現状もある。

(4)

参加を拒みたくてではなく、参加しなくても現実的にできないというジレンマを抱える信徒がおり、参加できないことが罪悪感をもたらしていることに配慮すべきである。

(5)

小教区からの回答が大多数であるために、小教区内の問題ととらえられてしまう傾向があるが、「地域ごとのグループのわかちあい、奉仕活動や情報交換が活発になる」といという意見があった。小教区という枠を越えて、同じような問題意識のグループも存在している(医療関係者、宗教科教員etc.)。

(6)

外国籍の人との協力も前進している場合と、今後の課題である場合がある。「日本人と外国人の信徒と一緒に、

日本語の勉強もかねて日本語でわちあいをしている」という小教区もある。

- (7) 「ハラスメントに対する意識をしっかりとってほしい」との意見があり、教区全体として、性的虐待やさまざまなハラスメントの防止の徹底が求められている。

■質問9 (識別することと決断すること)

皆さんの教会の決定は、どのような手順と方法で決定されているでしょうか。共同での識別が行われているでしょうか。どうすれば、それらは改善できるでしょうか。透明性と説明責任を、どのように促進できるでしょうか。

- (1) 「祈りのうちに」決断をすることの大切さに言及した回答はごくわずかだった。「イエスが人とかかわるときの目線を考えて、共同体の中でも発言し、決定する」という回答や、「少子高齢化などの危機的問題も転機になると考えたい」というような回答は、識別の経験から出たものと感じられる。

- (2) 「共同識別の前提には個人での識別がある。霊的同伴等を通して自己を知る必要性がある」「聖霊の導きを祈って、話しあい、聴きあい、共同で識別し、合意に至るよう」に決断するプロセスが重要」という回答から読み取れることは、共同識別には指導者やスーパーヴァイザーが必要で、その養成の必要性がある。

■質問10 (「シノドス性」《ともに歩むこと》の中で自己形成すること)

皆さんの教会の中で責任ある役割を担っている人々が、互いに耳を傾け合い対話しながら、「ともに旅をする」教会がさらに成長し、共同で識別と決断ができるようになるため、お

互いにどのような養成ができるでしょうか。何が妨げになるでしょうか。

- (1) 自己形成や養成についても、回答数の多さから関心の高さがうかがえる。講座等の学びの場を望む声もあるが、多様な人々の思いに気づくために人と人との交流、そのためのわちあいの場が必要だという声もある。

- (2) このシノドスの回答のために、「10の質問への回答をそれぞれが考えてわちあいの場がもてたことは、大きな恵み。ともに歩むことについて、もう少し深く味わっていきたい」と、養成の体験ととらえた回答もあった。

- (3) 養成は、「信徒、奉獻生活者の持続的な研修、信仰養成が重要。社会について関心をもち、自己養成の必要性を認識し、学び行動する姿勢が大切」というように、神のみ旨を行うために生涯を通じて必要なものである。共同体が成長する基礎として、互いに敬意と感謝を伝え合うためのトレーニングが必要という声もあった。

その他の気になる回答について

- (1) コロナ禍において感染予防を目的としたミサの参加制限の意図が理解できず、教会から歓迎されていないと感じたという声があった。外国籍信徒(司祭)がある程度日本語が話せたとしても、理解しやすいよう表現を心掛け、理解できたかどうかを互いに確認しあうことを忘れないようにしてほしいという要望もある。外国籍の人は、理解できていなくても、聞き返すことを遠慮してしまう場合がある。

C. 総評、次の段階に向けて

〈まとめ、総評〉

(1) 京都司教区は、「交わり」を霊性の基本として、皆が参加する福音宣教共同体になるために、2001年来、全小教区が共同宣教司牧に取り組んでいるので、ある程度シノダリティの体験があり、小教区評議会が意思決定の場であるという意識は浸透しているが、現実には、共同宣教司牧の精神とプロセスは不十分である。神のみ旨を行うために一人ひとりが養成され、祈りながら小教区の意思決定に参加できるように努力しなければならない。

(2) コロナ禍の困難な状況の中で、熱意ある回答が寄せられており、ことばや文化の壁、教会の枠も越えている。シノドスへの質問に答えるプロセスで多くの気づきの体験、見えないものを見、聞こえなかったものを聞き、わしたたちの歩みを困難にしている要因が明らかになった。「信者の高齢化」や「若者の教会離れ」「多言語・多文化、多様な価値観への対応」「財政の問題」という以前からの課題もコロナ禍でさらに顕在化している。

(3) 信徒同士がかかわって、支えあう集まりには課題もあるが喜びもあり、互いに理解しあい、肯定し合うためにわかちあいが有効であるが、現実には互いに時間が取れない、言語の問題といった不可抗力的要因による困難がある。今後も継続的によいわかちあいの体験ができるようになることは課題である。

〈次の段階、さらなる識別を求めるポイント〉

(4) 「ともに歩む教会のため―交わり、参加、そして宣教―」という今回のシノドスのテーマを受けて、回答した多くの信徒は、言葉や文化の違いを越え、福音を宣べ伝え

たいという熱意に満ちているので、今後も喜んで参加できる、負担でなく集まる喜びを感じられる共同体になる。その際、教会の現状において、すべきこと、できること、しなくてもよいことを識別していく。

(5) 教会共同体の交わりを深めるために、組織や計画に流されずに「人を大切にする」という基本を徹底する。多様性を優先する人間関係は困難なものであっても、互いに敬意と感謝をもって励ましあい、閉ざされることのない、開かれた仲間意識を育てるための実践を大切にしながら、豊かなわかちあいできる共同体に発展させていく。

(6) さまざまな言語や文化がもたらす福音の豊かさをわかちあい、学びあう。さらに、良いわかちあいの体験そのものが必要なので、さまざまな違いを超えた良いわかちあいができるように養成を行う。

(7) 正義と平和、社会の問題に関心をもつ人と連携しながら、出向いて行く教会を目指す。そのための、共同体づくり、生涯養成を行う。

(8) エキュメニズムについての理解を深め、協働できることを考える。

(9) シノドスの原点である第二バチカン公会議の学び直し、「教会とは何か」という問いに向きあい、これからの教会のあり方を考える機会としたい。



以上